講師：松尾清美　「歩けなくても大丈夫！車いすの生活を楽しもう」

プロフィール
佐賀大学医学部附属　地域医療科学教育研究センター福祉健康科学部門　助教授
自らも脊髄損傷である。
実体験としての脊損者の現状を知った事で早期社会復帰を説き積極的アプローチをしている。
脊髄損傷者の為の住居支援、社会復帰支援、　職能支援等に精通している。

人間、生きているかぎり障害はいつか訪れる。人間らしく生きる事、どんな状況にあってもいかに生きたかを大切にして欲しい。21才の時交通事故で脊髄損傷になった。その体験を元に、心の軌跡を通じて今脊髄損傷になり苦しんでいる多くの当事者・家族に訴える。「障害を負うことになり不便を感じることは多いと思う。しかし、　生活の中で工夫を重ね自立度をアップしながら外へ出る勇気を持って欲しい。」脊髄損傷は大きな障害だがそれ程苦しむことはない。

障害を負ったことで苦しんだ時期もあった。　そんな体験から苦しいとき悲しいときは大いに悲しみ、　苦しんで欲しい。　それらもいつかは癒えてくる。　障害を受けてしまったが、それにも増してより多くのものを得ることが出来る。　佐賀大学助教授として忙しい日々の中で障害とは、その受容と立ち直りについて、そして自立の道へと導くために多くの仲間にエールを送り続ける。
「障害は不便ではあるがそんなに大変ではない」

Q＆Aの中から　　障害受容に関して看護師の立場からの質問
家族と本人、　それぞれの受容が出来ていないのにどうして介護を続けるのだろうか。　障害の受容をしないのか理解に苦しむし分からない。　看護士として受容を勧めること事態に問題があるのだろうか。　受容させる為にも両者のメンタル面でのフォローが大事だと思う。　自分自身がその対応においてどうしたら良いか分からなくなる。

A当事者には問題を抱えずに心療内科・精神科へ行く事を勧めて欲しい。　受傷直後は、　誰でも悩む。　しかし、　時間の経過が心を変えてゆく。　周囲の寛容さが必要だしみんなでカバーをしていく。　是非、傍でサポートをして欲しい。
泣きたい時、　死にたい時もあるがそれを乗り越えて生きなければならない。　受容には時間が掛かる。
それでも障害を受け入れられるタイミングやターニングポイントはあるのでそれを探して欲しい。
まれに障害の受容が出来ず、　重篤な病気になってしまう事もある。　その為のサポートが必要。　歩けなくても手が動けなくても生きていける。　私の経験から考えてもなんとかなる。　障害の受容は大変だがかわいそうなまま生き続けることは無い。　自分の人生を大切にこれから事故の後遺症で苦しんでいる人々に力を貸して欲しい。